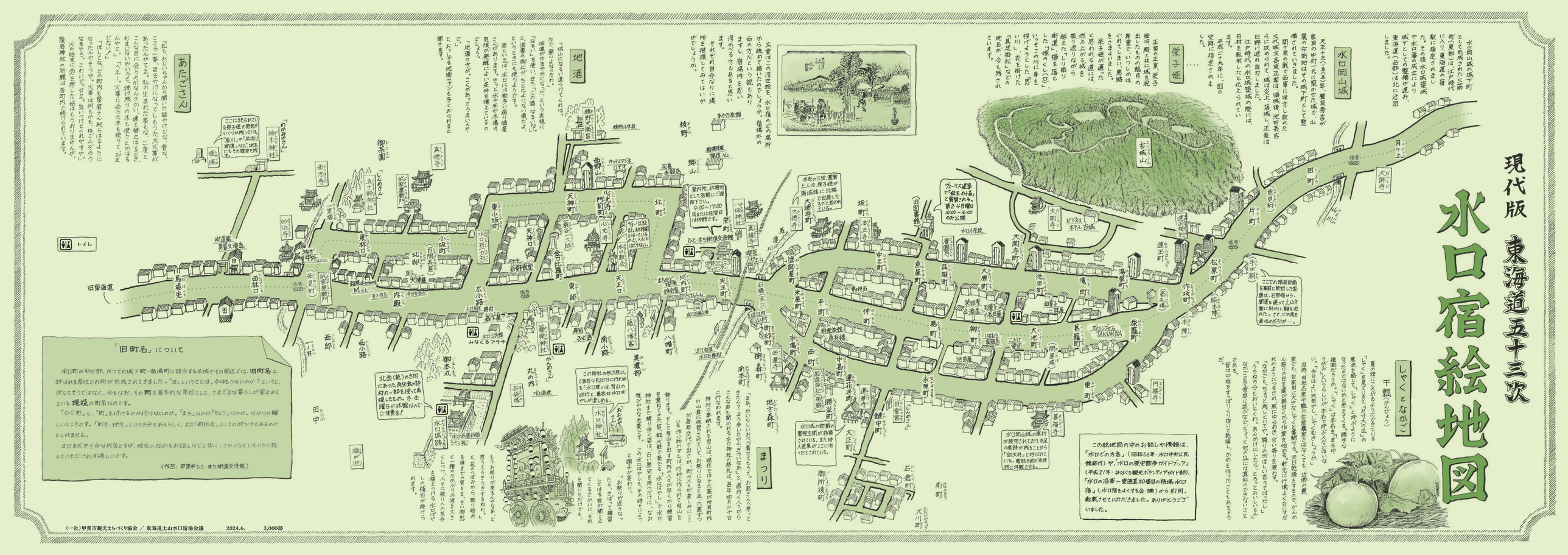

現代版

東海道五十三次

水口宿絵地図

旧東海道
馬場先
西林口
西見附
武家屋敷門
うなぎ 中外
街道蔵 美冨久酒造
妙沾寺
一里塚
西方寺
しんめさん 五十鈴神社
武家屋敷門
真徳寺
御茶園
わかみやさん 柏木神社
姫塚
トイレ
東林口
北邸
百間長屋
小坂町
水口石（力石）
東小坂町
天神口
和風dinning Mえむ
菓子 大津屋
青木酒店
津田電器店
内殿
広小路
スヤキ 谷野食堂
寿司 森下屋
木村輪業
水口公民館 みなくるプラザ
西邸
西小路
一ノ井
御本丸
丸の内
布袋塚
水口高校
水口城跡
水口城資料館
梅が池
田中
藤栄神社
かんめさん
おおみやさん 水口神社
天神町
心光寺
門前町
巌谷一六邸
金刀比羅町
心光寺
水口教会
綾野天満宮
綾野小学校
西郷山
カットスタジオ ロデオ
花喜 米穀店
綾野
郷山
相撲茶屋 賀位山
あや乃旅館
北町
東邸
天王口
寿司 ふじ吉
南小路
藤八幡宮
八幡町
美濃部
まちかど喫茶 待合室
河内町
けんしん
水口石橋交番
天王町
ひと・まち街道交流館
中部コミュニティセンター
八坂神社
栄町
真福寺
喫茶 ポエム
近江鉄道 水口石橋駅
石橋（京口）
近江肉 山村
町邸町
街森町
南本町
西蓮寺
地方森町
渡川
馬
塗師屋町
米屋町
市場町
大徳寺
大徳寺町
坂町
本正寺
中之町
郵便局
平町
料理旅館 魚兵楼
伴町
西町
中島町
国造神社（弟殿）
勝栄町
蓮花寺町
蓮華寺
大正町
御所後町
鍵中町
日雲宮
しんめさん
石倉町
南町
大川町
旧図書館
水口小学校
慶園寺
魚屋町
呉服町
大原町
笑四季酒造
和菓子 長田屋
大岡寺町
池田町
和菓子 一味屋
恵町
柳町
いまむら呉服店
こぶけ薬局
大池町
問屋場
池田屋
永原町
善福寺
葛籠町
ダイニングカフェ TAKUMIYA
旅籠町
東町
円福寺
滝町
湯屋町
高札場
作坂町
脇本陣
本陣
松原町
牛が淵
速王町
速玉神社
大岡寺
ビジネスホテル古城
古城山
片町
東見附
田町
信号
月ケ上
大師寺
山川

ここに祀られている栄子姫の悲話がいくつか残っている。「思川」や「尻振り街道」など、地名にもその歴史を残す。

案内所、休憩所として気軽にご利用下さい。9:00～17:00 月または祝翌日は休館です。

ヴォーリズ設計。幼稚園となっているので、入ることはできない。

本寺の三世、運誉上人は、栄子姫が落城後に北脇で出産した子だと言われている。

ヴォーリズ建築で「珠玉の小品」と賞賛される。第2・4日曜日 10:00～16:00のみ公開

ここでの暗殺計画を事前に察知した家康は、石部宿から、間道を通って土山方面に向かい、難を逃れた。さて、どの道を通ったのだろうか…。

北西（乾）の方向にあった角矢倉の部材の一部を使って再現したもの。木・金曜日が休館なのでご注意を！

この神社の例大祭として毎年4月20日に行われる「水口祭」は、曳山の巡行と、勇壮な水口ばやしが楽しめる。

水口城の御殿の書院玄関が移築されている。また俳人芭蕉がここに泊ったとされている。

水口岡山城の廃材が使用されており、手足の痕跡が残ることから「血天井」と呼ばれている。電話予約で参拝時に拝観できる。

水口岡山城の城下町として形成された三筋町（東部）は、江戸時代に入り、東海道の宿駅に指定されました。その後水口城築城や水口藩の成立により城下としての整備が進み、東海道（西部）は北に迂回しました。

水口岡山城

天正十三（一五八五）年、豊臣秀吉が家臣の中村一氏に築かせた城で、山麓の市街地はその城下町として整備されていきました。

関ケ原の戦で西軍に味方し敗れた三代城主長束正家は、帰城後、池田長吉らに攻められて、城は炎上、落城し、正家は日野に逃れ自刃しました。

江戸時代の水口城築城の際には、石材を転用したと伝えられています。

平成二十九年に、国の史跡に指定されました。

栄子姫

正家の正室、栄子姫は、殿と共に城を脱出したものの臨月の身重で、いつしかはぐれてしまい、悪路をさまよいました。

栄子姫が通ったと思われる道には、燃え上がる城を振り返りながら越えた「しり振り街道」、櫛を落とした「姫のくし（口）」、いっそこの川に身を投げようとした「思い川」、衣を掛けた「具足掛松」などの地名が、今も残されています。

広重はこの浮世絵を、水口宿のどの場所から眺めて描いたのでしょうか。宿場外の西の方だという説もありますし、宿場内を思い浮かべる方もあると思います。

それぞれ自分なりに場所を推理してみてはいかがでしょうか。

地酒

「城山になるい道つけてくれはったで、登りよなったわ。」

坂道がゆるやかになった、という表現に「なるい」を使い、また「この酒、なるいな。」と、酒豪の御仁が、ちとたよりない酒だよ、というときにも使うようです。

酒といえば、水口には数多い造り酒屋さんがあります。きっと水や米や冬場の気候が発酵によい条件を備えているのでしょう。

「地酒の方が、ここがあってうまいんやで。」と、おっしゃる地酒ファンも多くおられると聞きます。

あたごさん

「私も、おじいちゃんから聞いた話やけどな、昔な、ここら一帯、まるやけになってしもうた大火事があったんやてえ。私の生まれた家もな、二度とこんな目に会うのかなんさかい、建て替えはるとき、おまじないやいうて、焼け残りの木も使うとかはるんやて。」「へえー。火事に会うた木を使うて、おまじない！」

「ほしてな、どの町内も愛宕さん祀らはるようになったんやそうや。火事は何もかも、ねごんぞのうなるやろ。こわいでっせえ。気いつけとくれやすや。」

火の始末に念を押した姑はもうおりませんが、愛宕神社の祈願は各町内で続けられています。

しゃくとなかご

干瓢（かんぴょう）

夏の畑にころがるようにできている「しゃく」を見ていると、「尺寸大の瓜」の意味を略して「しゃく」と呼ぶようになったのではないかと思えてくる。勝手な推測だろうか。「しゃく」は本名を「まるゆうがお」というらしいが、本名で呼ぶ人などはいない。「今日はよい天気やし、しゃくむきしょうか」

当時、当地名産干瓢の生産農家ではなくても、近郷の農家でも、自家用に大きなしゃくと奮闘する。天日乾燥をするので、かんかん照りの日を選び朝早くから作業を始める。軒先に行儀よく白いすだれのようにつるされ、風にゆらめき、甘い香りを漂わす。

「なかごも、ちょっと残しといてや。隣りのがほしい言うてはったし」

「うちねの分もおいとくわ。あんかけにしたら、とろっとおいしいもん」

なかごまで食卓に並ぶなど、ちょっと他の瓜には真似のできないことである。

昔は中味をすっぽりくり抜いて乾燥し、かめを作ったこともあるそうだ。

この絵地図の中のお話しや情報は、「水口での方言」（昭和56年・水口中央公民館発行）や、「水口の歴史散歩ガイドブック」（平成21年・みなくち観光ボランティアガイド部）、「水口の沿革～東海道50番目の宿場水口宿」（水口宿をよくする会・編）から引用、転載させていただきました。ありがとうございました。

まつり

「まあ、かいらしいおべべ着せてもうて。お宮さんへ参ってきたん？よう歩いたやん、きついなあ」と、道行く人々からこんな声も聞かれる水口神社の祭礼は、毎年四月二十日に行なわれます。

神社に奉納される曳山は、現在では十六基が所有町内の山倉に保管されていて、お祭りになると五、六基ずつが毎年交代で出され、町の人々が楽しみにしている作り物のダシは、巧妙に作られて曳山を飾ります。そして曳山を出す町内の人々が早くから練習を重ねてきた笛、鉦、太鼓で奏でる「水口ばやし」で水口神社まで練り歩く姿は、古い歴史を持つだけに、なお雅びやかな光景です。

この水口ばやしも、その時々によって調子が変わり、

「お祭りが近うなったら、きばって練習してはる音が聞こえてくるさかいに、それを聞いただけでも、もうお祭りが来るんやなあ、と思うてうきうきするねわ。」

と、花のつぼみから、散り始める頃までの宵々を、甘い郷愁と一種のたかぶりの波を大きくしつつ、人々に祭りへの気分を植えつける水口ばやしの稽古が続けられます。

「旧町名」について

水口町の中心部、かつての城下町・宿場町に該当する区域やその周辺では、**旧町名**と呼ばれる単位での町が形成されてきました。「旧」ということは、今はもうないのか？というと、決してそうではなく、今もなお、その**町**を基本的な単位として、さまざまな暮らしが営まれている**現役**の町名なのです。

「〇〇町」と、「町」を付けるのか付けないのか。「まち」なのか「ちょう」なのか。なかなか難しいところです。「町方・地方」という区分もあるらしく、また「町内会」としての呼び方もあるのかもしれません。

まだまだ不十分な内容ですが、地元に伝わるお話しなどと共に、これからもいろいろと教えていただければ嬉しいです。

（作図：甲賀市ひと・まち街道交流館）

(一社)甲賀市観光まちづくり協会 ／ 東海道土山水口宿場会議　2024.6.　3,000部